

望東尼『みのとしうまのとし』翻刻と解題：『向陵集』との関連において（下）

進藤，康子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8954>

出版情報：文献探究. 44, pp.33-60, 2006-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

望東尼『みのとしうまのとし』翻刻と解題

『向陵集』との関連において（下）

進藤 康子

前号に引き続いて、福岡市博物館蔵の野村望東尼和歌資料の翻刻・解題をする。

前回は、望東尼の『向陵集』の歌稿の一部であろうと推測される資料として、嘉永四年ごろの『歌集 言道・望東・貞能・宇逸』（以下『歌集』）を翻刻・考察したが、今回は、同じく福岡市博物館の望東尼資料『みのとしうまのとし』（請求番号 野村望東尼遺品030）を取り上げ、翻刻および紹介し、加えて本資料と『向陵集』との関連において新たに考察していこうと思う。

一 資料的価値について

『向陵集』は、天保三年から慶応元年に及ぶ、望東尼二十七歳から六十歳にかけての三十四年間の長きにわたって収録された約千九百首の歌集である。それに対して『みのとしうまのとし』は、安政三年から安政五年にかけて筆録されたもので、歌数三百六十五首（註1）、そのうち『向陵集』と重なる歌が約百九十首程あり、『歌集』同様『みのとしうまのとし』も『向陵集』の歌稿の一部であると思われる。（註2）

この歌稿には、師の大隈言道の朱点および批言があり、きめ細やかな添削の跡がみられる。安政三〜四年の言道は、今泉の自宅ささのやでの指導はもちろんのこと、久留米の藩士拓植佃厚（七草園の翁、106番歌参照）や、飯塚の宝月楼古川直道、納祖神社神官青柳直雄、造り酒屋の小林重治などを中心とする地方教授所の歌会指導にも全力をあげて取り組んでいた時期である。（註3）言道門下全盛期の華やきが伺える前半部分と、後半は、『草徑集』を出版するために上坂する言道に対して、弟子たちの名残惜しい様子が紙幅を割き、その後の「うまのとし」は、言道不在の歌会をささやかに持続する門下生の動向などが記されている。加えて、『向陵集』においての年号の間違いや、『向陵集』では削除されたであろう部分や、逆に加筆されたであろう箇所などをも、本資料によって新たに知ることができる。

本資料の見返しには、「鋸谷居野村畚藏書記」の蔵書印がある。この畚（あらた）は、夫貞貫と先妻との間にできた長男貞則の子で、幼名野村才丸、後に貞和と名乗った。天保二年生まれ、明治二年没。嘉永四年、十歳にして馬廻組で三百三十石を領すが、「安政四年のとし」に詠まれた10番歌の詞書「貞和かとしころもと子にいたつきありて道ゆくさまなとれいならさりければ」としおくるにしたかひといつるこ

などとはちらひなれば」からわかる様に、ながらく神経痛に悩まされ家に籠もりがちとなり、病気の進行で手足が不自由となってからは、弟の貞省に家督を譲り、後に「畜」と称したその人の印である。血のつながりはなくとも孫にあたる者の旧蔵ということになり、そのまま野村家から出ることなく保存されていたであろう貴重な望東尼自筆の新資料である。

二 歌稿『みのとしようまのとし』と『向陵集』

「みのとしようまのとし」の表題は望東尼による直書きで、当時の年号をそのまま歌稿の名としている。みのとしは安政四年、うまのとしは安政五年にあたるが、加えて見返しの片隅に、「安政三年十二月うたあはせに」として三首の書き付けが残る。

内容についてみていくと、『みのとしようまのとし』中の詞書は、歌の詠まれた状況をできるだけ残しておくとしている。合わせて、その時の歌の会合に出された題も記録するという筆録の姿勢が見受けられる。例えば、「三日に翁のきたられる時 題梅」（8）（以下括弧内は歌番号）では、言道（翁）が平尾の望東尼の自宅「向陵」に來た時の歌会のこと、「正月十一日馴花亭にかれこれつとひして 題梅」（9）は、馴花亭より薬院の八木つる子の自宅での歌会であることがわかるが、いずれも『向陵集』では削除されていて、場所も日時も知り得ない。「う月十四日はかりにおきな遠きところよりかへりてきたられけるにさま／＼の題をいたしてよみける中に 蝶」（100）も、『向陵集』では、題「群蝶」だけで、細やかな状況が削除されている。「まことか半日五十首うたよみける時にましりて 題山」（4

1）の孫との歌の稽古や、「二月二十五日杉のやにして 題川花」（21）なども同様である。

言道が大阪に向けて福岡を旅立つ時の弟子たちの見送りの場面では、124〜129番歌の詞書き部分でより詳しい状況を知ることができる。特に、「八月十五日に言道翁のみやこにいてたゞんとてこゝにきたられる時」の歌、「たえかたきおもひをたちてわかるなりきみかこゝろのたひなればこそ」（125）は、『向陵集』でやはり削除されており、これまで陽のあたることになかった歌であるが、言道と別れる際の望東尼の断腸の思いが切々と伝わってくるようで、なんとも捨てがたい歌である。

また、「さてかの日になりければ、ふたまたせといふところまでおくりにとて、いまいつみよりかれこれつらたちて行道にて、田中なにかしはいへに翁をみて行ければ、したかひ行もあり、おのれ二人三人さきたちて、ちよのまつはらのうらてなる松陰に行てまちあたるほど、まさきにかいつけたりける」（127）から、出立の日弟子たちは、言道の居所の今泉から一緒に連れ立って行き、送って行ける所まで、せめて二股瀬までは師を見送ろうと、ぞろぞろ後ろから着いて行ったことがわかる。道すがら言道があちらこちらの知人に挨拶に寄る度に、じつと表で待ったり、またあるいは、少し先に行つて砂浜で待機する。

その時に、松原の砂に戯れに歌を書いたのが「みやこより君かへり來とまつはらにかくてありなはいかにたのしき」（127）である。

続いて「いとおそく來たられけるを、かしこにおくりゆく道にて、けふはこのさとにやとりて、人々と月見んなどいはれければ、たれも／＼さもといひて、かしこのかはらにてさけなととふへけるうち、あまりにはしたなきやとりなれば、いまよりさゞくりのさとまでゆき給

へなどそゝのかしてしひてわかるゝとて」「きみとわかうみ山とほくへたつとも月はかたみに見るへかりけり」(128)においても、道中で月見の酒宴などをしたりして、あまりに大騒ぎとなり見苦しいので、名残惜しいが、ここでわかれ、言道には八木山峠の麓の篠栗あたりに宿をとるよう勧めている。旅立つ言道とどうしても別れ難い望東尼たちの気持ちを「月はかたみ」としたこの「きみとわか」の歌に見ることが出来る。

言道はすぐに大坂に向けて出発したわけではなく、篠栗から飯塚に回った。飯塚には、小林重治、青柳直雄、古川直道をはじめとして多くの弟子がいた。特に、小林重治は、後に言道が大坂で『草径集』を上板する際の最大の出資者でもある。どうしても、飯塚の大事なパトロン達に大坂出立の挨拶をしておかなければならなかった。

それに対して望東尼は、いったいいつまで飯塚に滞在するのとかとやきもきしている。その微妙な心境は、「はつかはかりまていひつかのさとにありて、舟でせんとていてたゞれけるに、そのころ風いとはけしう吹けるにかしこに文をつかはすとてかいつけゝる」の詞書と、「こよひ吹く野分をきみかおしはかり舟でいそかて待しうれしき(129)」の歌に詠み込まれた。飯塚から芦屋へ行き、芦屋から船出を待つ間に、大風が吹いて出発できないでいるのを聞き及び、半ば心配しつつも、まだ近くに居る言道にうれしいやらで、早速、文に歌を付けて書き送ったのだった。

その後「十月すゑつかたまでもあしやのさとに翁のやとられけるよしきゝていひつかはしける」の詞書から、十月の末になっても、まだ難波に行っていないことに、少なからず苛立ちさえも感じ、「なにはちにくくともゆかぬかりふしはよしやあしやとおもひこそやれ」(14

1)と詠み送った。八月十五日に福岡の今泉を発つていることを考えると、随分長らく芦屋にも滞在していることとなる。事あるごとに揺れ動く望東尼の多感な心情と師への思いを垣間見る。しかしながら、望東尼上坂以後、彼女の思想の変化とともに、言道へのまめやかな心情は確実に変わっていった。

ところで、本資料によつて『向陵集』中の言道上坂の年号の記載に間違いがあることがわかった。『向陵集』を編纂する段階で、歌稿を参考にしながらもまた新たに推敲していったのだろうが、言道の大坂出立は「安政四年のとし」(4)「八月十五日に言道翁のみやこにいたゝんとてこゝにきたられる時にさま／＼ものかたりのつひてに」(124)であるのに、『向陵集』では「安政三年巳午のとし八月十五日に大隈言道のうし都にのほらんとにはかにおもひたゞれければとゞむべきことにもあらず。わりなくわかれすとて、おなしく六日にわかいほりにむかひけるとき」と認められ、「安政四年」を「安政三年」としている。これは、本資料の見返しに、「安政三年十二月うたあはせに」と数行の書き付けがあることから、安政三年のできごととしてしまったのではないだろうか。前後の歌の関連から見ても、なんらかの書写ミスであろうと思われる。

また、「ゆきまとふかた山かけのわかれみち」(31)から、「ゆきまとふかた山かけのわれみち」『向陵集』を訂正することが、「せくこともあきはなかりしまきのとを」(334)から、「さすこともあきはなかりしまきのを」『向陵集』を同じく訂正することができる。

さて、言道上坂後の和歌指導の様子を知る箇所として次のような例がある。

「みきのうたともかきて翁のもとにつかはしけるにかへしとて

言道

わかれつゝたひゆく道のくれゆけはおもひやるやとおもひやりつゝ

以上 二百六首（223）

とある如く、言道不在でも、和歌訓練のため、二百首程度ずつ何度かに分けて言道に送付し、通信教育の様な形で添削指導を受け、『向陵集』の完成に向けて準備していったと想定される。『向陵集』ではやはりこの部分も採られておらず、本資料の方から補っていくと編纂過程が窺い知れる。

また、言道上坂以後、言道不在の歌壇を細々と支えた望東尼の身近な人々の名が、その折々に登場する。太宰府の陶山一貫（巻）、緒方洪庵の医学の弟子で言道の歌友武谷祐之、谷川幹辰、前田知良、四宮素行など、この時期の歌友の動向も詞書から知る事ができる。

加えて、言道に望東尼が和歌の下の句を二通り提示し、選択及び添削を乞う場での、香川景樹に関する文言「かけきかうたに似たるものから……」（135）なども注目される。言道は歌論で「香川景樹が集桂園一枝 己れ八九年前書肆にてふと見しに その名に目がつかで凡人の集ならめとあなづりたるを 今よく熟読するに 古人に劣れること莫大なれど 今人にまされる事百倍なり」「景樹などは古今集などをかく難き事に言へり。田舎人は古今集にも易く近づきたる面もかなり。さる事あるべからず」（『ひとりごち』）と述べており、また、「景樹のいへる 歌は思慮を加ふべきものならねば 古に似せんとする暇あらんや わがこれを似せたらんはやがて飾れる偽のみ」（『ござのちり』）と、かなり景樹を意識している。これらの記述と照らし合わせて、門下歌会指導に於ける言道の歌論の構築と実践といった観点から、今後精査すべきところであろう。

文久元年十一月、望東尼は同門の野坂常興とともに、言道を慕って大坂へ旅立つ。亡夫の遺稿を言道に添削してもらい、出版したい旨が「貞貫君（夫）もなくならせ給ひしかば忘れ形見の言の葉は、いかで梓にも彫らせてむとのたまひし事もあれば」と『上京日記』にあり、また、『向陵集』に言道の序を約することも一つの目的としていた。それは、師の『草径集』同様に、自らも家集を上木したいという思いがあつてのことではなかったか。しかしながら亡夫の集も、『向陵集』も幕末の動乱の中で、結局のところ実現し得なかった。

以上、『みのとしようまのとし』の概略を示したが、今後これらを基礎資料として、更に『向陵集』を精査しつつ、福岡市博物館望東尼資料の皆悉調査を進めていきたい。言道と望東尼の関係は上坂以降微妙に変化していったのだが、しかし、お互い目指す道は分かれようとも、勤皇思想へと突き進む望東尼に対して、程よい距離をおいて見守る師言道の姿をも詳しくみていければと考える。そして、人々の思いを飲み込んで激しく動く時代のうねりの中、言道歌壇の位置とその動向の解明へと繋げていきたいと思う。

三 翻刻

(一) 書誌

- 資料請求番号 030 福岡市博物館蔵野村望東尼遺品目録
- 巻冊 写本 一卷一冊

- 書型 縦 十一・八種 横十六・六種 横本
- 外題 墨書外題「みのとしようまのとし」
- 用紙 楮紙 白色 本文共紙
- 丁数 四七丁
- 備考 野村望東尼自筆歌稿 大隈言道の朱点、朱批あり。
「鋸谷居野村畚蔵書記」の蔵書印が見返しにある。
末尾に覚書きあり。

(二) 凡例

- 一、福岡市博物館蔵『みのとしようまのとし』を底本とした。
- 一、和歌に通し番号を付した。
- 一、『向陵集』（福岡市博物館蔵）と重なる歌は、『みのとしようまのとし』の通し番号と歌に、3 の如く網掛けで示した。
- 一、言道の朱点は・で、批言は（ ）で示した。朱の○△印は原本の通りに写した。
- 一、原本の表記は、漢字仮名などできるだけ原文のままとしたが漢字の字体は一部現行字体によった。
- 一、丁うつりは「で示し、表裏をそれぞれ オ、ウと表記した。
- 一、末尾にある見せ消ちの覚え書きおよび歌の書き付け部分等は、翻刻を省略した。
- 一、破れや見せ消ちで判読できない部分は□□とした。

(三) 翻字

みのとしようまのとし 「表紙」

安政三年十二月うたあはせに

- 1 ・はかくれにおもてふせたる山椿さてこそしもにいろもかはらね
- 2 ・たゝ一枝さきてほとふるうめの花冬日陰をこゝろみるかも
- 3 ・ゐてこゆるみつおとさむき川風にふかれてもとくさけるうめかな 「見返し」

安政四年のとしのあけかたまきよりねさめておきいてたるあけさりければ

- 4 山のはのあけたつそらを待ちかねていくたひあくるねやのまとのと

おなしくあかつきはかりに

- 5 しめなはのおほろ／＼にうつりくるまとよりとしはあけはしむ也
- 6 けさのまをのとかにせんとことしけき冬の日数をとかくすくしつ
- 7 ・よひとよにひのなかさゝへかはるまで世をのともてもきたるは

る哉

三日に翁のきたられける時 題梅

- 8 ・山さとのしはのけふりにむせひつゝひらきかねたるのきのうめ

かな 「へい・オ」

正月十一日馴花亭にかれこれつとひして 題梅

- 9 ・はるたちて心しつむるひまもなしあまりにうめのさかりいそけ

は

10 ・はることにこゝろはかりは月の瀬のうめのこのまになれつゝそ
ゆく

貞和かとしころもと子にいたつきありて道ゆくさまなとれ
いならさりければ としおくるにしたかひとにいつること
なとはちらひなれば

11 ・みさりても心のかたはになかりせはゆみやとる身にはつること
なし

十八日れいの日にて 題梅

12 ・うめのはなさかりまたなくはつ春をさ／＼しくもふるみゆき
かな 「(1・ウ)

さま／＼の題なとよみける時みのとしのこよみといふこと
を

13 はるおそきこよみのとしをいつはらてかすみさへにそたちおく
れける

かすみ

14 ・あわゆきにふりけたれたるはるかすみけさはつもれる山にたな
引

うくひす

15 ・見しこともなき山陰のうくひすのすみかに心やらぬはるなし
正月うたあはせに

16 ともしひをふるとしなからかゝつゝよふかくはるをまぢく
るゝかな

17 ・わたのそこかすみとちたるあさなきにはるのこゝろはうこきそ
むなり 「(2・オ)

18 ・のきちかき梅のした風かをりきてまどの引ともさゝぬよはかな

19 ・さゝかにのかけふるしたるいとのまにほころひそむるもりかけ
のうめ

20 ・山まつもふりうつめくるしらゆきをもれいてゝたつはつかすみ
哉

二月二十五日杉のやにして 題川花

21 ・またちらぬ花とは見れとかはなみに心さわかすみなそのかけ
馴花亭にして 題華

22 ・すへらきのすくるかみよはゆきつけていちにうりいつる冬のた
けのこ

はつはるのうたとて

23 ・立かはるとしのはしめはよの中のうきせのなみもなきまなりけ
り 「(2・ウ)

24 ・かれはてしまへの川せもなかれきてつのくむあしのめつらしき
かな

25 ・あわゆきはふりかゝれともつゆはかりむすひとめたるあをやき
のいと

かとまつ

26 ・はつはるのなかはすきつるひかすさへ見らてさひしくひけるか
とまつ

山家 (春)

27 ・山郷はやねのみゆきのとけそめておつるやはるのおとつれとき
く

28 おもふことありけるとしのはしめつかた
・身をわふるこゝろもはるはかすみきてうめ柳にもうつりゆくか
な

いとま

29 ・いとまなき人のこゝろもうちなひくやなきのいとにひかれてそのふ「へ3・オ」

待鸞

30 ・はることにおなしためしとなりけりわれにまたするうくひすのこゑ

やまちの梅

31 ・ゆきまとふかた山かけのわかれみちうめのかをりのかた／＼にして

(山もと)

32 ・川上のかすみなかれてかはかみからわれきぬるうめのひとむら

ら

ゆきの日さゝのやにして

33 ・かくもいへはふるをいとふにゝたれともはれなはへのゆきも見えまし

はるのはしめひさしのおちたるを見て

34 ・はつはるのかせにおちたるいたひさしなくてそのきはあらたまりける

人のやとりてかへりけるまたのあした「へ3・ウ」

ゆきのふりければいひつかはしける

35 ・いまひとよきみかやとりはもろともにまちうへからしけさのしらゆき

酒

36 ・よな／＼にさけともろねの老らくはあかつきさむきわかれの

して

37 ・かへるかりあきくるまでのわかれとておくりいでたる山のは

月

38 ・たひねするわれにも花はうちとけてそらふみならぬふまひをそ

する

39 ・ふくみぬる花はきのふのおもゝちにかはるゑまひもまたなかり

けり「へ4・オ」

40 ・をとめらかかはへのよもきつみさしてまた水さむきしゝみをとめ

ほる

まこともか半日五十首うたよみける時にましりて 題山

41 ・はるかすみ立そめしよりのに山にこゝろのこまははなちかひして

いけ

42 ・ちる花をみきはにするはるかぜにたつかげ見ゆるいけのさゝ

なみ

43 ・いたつらにとしふるよろひいとくちてみたれぬみよはあらはれ

にける

44 ・さくらちるあさちはらのたまくらにこゝちよけなるはるの山

まくら

風
「へ4・ウ」

さゝかに

45 ・あさな／＼ぬきとゝめたるさゝかにのちすちのいとやつゆのたまのを

まのを

うくひす

46 ・はるることにかはらぬうさはうくひすをきかぬまにゆくひかすな

りけり

花さかり

47 ・このまよりしのひにかよふ松風のおともゆゝしきはなさかりかな

な

こま

48 ・はるのをかへしつかれて引人もこまもしつかにかへるゆふく

れ

くも

49 ○・さくら花ちりこぬさきにちることをおもひかけたるくものいと

かな

落下（下句今少）

（とり見る）

50 ・ちるはなをひさのもとまておくりきてこゝろとるなりはるの山

かせ「へ5・オ」

また まひしかはるかはるの山風

花早散

51 ・老らくのそらおほえかはしらねともいつよりはるのさかりみし

（き）
（下ノ句今少）

かし

又

・花のひかすのたらぬこゝちす

暮春

52 ・とゝまらぬはるのゆくへをとしことにしたひなれたるこゝちく

せかな

はるのつゆ

53 ・さきかぬるはなにまかひし白露はたはかれてもうれしかりけり

り

（暮春月）

54 三月尽

・をとめらかまゆよりほそきありあけの月影はかりのこるはるかな

な

風前落花

55 ・わかゝたにせめては吹こさくらはなきておくへくも見えぬ山

風
「へ5・ウ」

みしかよ

56 ・いつしかとみしかくなれるはるのよをつかれてねたるあしたに

そしる

野橋

57 ・なのはなのかけにかくれしまろき橋しらてをかはをわたりつる

哉

さゝのやの翁のとしことにいひつかのさどにはるをすくさ

れければたよりにいひつかはすとて

58 ・はることに君をとらむかいひつかのさとのさくらはきりもす

てゝん

59 いかめしき松のふる枝にもゝちどりゆきちかひてもとふあさけ

かな

くもりひ

60 ・きのふよりものおもはしきくもりひのあめとこほるゝゆふくれ

のそら 「へ6・オ」

暮春月

61 ・まとのとにわかうへるてのかけ見えて老ゆくはるのありあけの

月

うまこか手あしのいたつきとしふれとおこたらさりければむさしのゆにもおしける時秋の人あひやとりてあまたゝひゆをくみかけるとねもころにもおしければものかたりのつひてに

62 ・老らくのころのやみのくらさままできみのくみしるいでゆなる

哉

かしこの川へのほたるなど見てありきける夕くれに二日市といふところのものゆくを見しれるものゝやうにおぼえてものいひければよろこひていろ／＼のくわしやうのものをかのやとりにおこせけるに 「へ6・ウ」

63 さつきやみくらきよのまのほたるより人のまことそさやに見え

ける

人々さけなとゝふへける時いまやうをうたひておのれにつくれとせちにひひければ

64 いてゆのさとのかりねにはしるもしらぬもへたてなくころの

あかもさるはかり身をもころもあらはせり

日ことのにほるたかとのよる／＼めくるさかつきころへたてぬまとあにはなきもましへよほとゝきす

大鳥居の式生の君ゆに物せられけるをしらていつものこ

とく人々ゆきてけるにかの人さきにいりてありければすへなくてしらぬさまにしてかへりてよみつかはしける

66 ・きみかいるいてゆとしらてかしこくも身をあらはしてま見えつ

る哉

さてかへりてのち日をかへてゆくりなくあひ見のちは時わかすおもひいてゆの君かことのはかへりことに

67 ・はしたなき身のやさしさもときわかすおもひいてゆとなりにけ

る哉 「へ7・オ」

う月はしめのつかた野間の山なるふちの花見にかれこれゆきける時

(こゝち) 石秀

(こゝち)

68 ・見るわれさへにまとはれにけり

(ふち) もと

69 ・山なみのかゝるこたちの中に来て

同

70 はるのとまりのふちなみの花

石秀

71 なにとなく立さわくめりくれはてし

山なしを見て 同

72 しる人なしの花さかりかな 「へ7・ウ」

もと

73 これぞこのはるのなごりとさくものを

おなじく六日陶山翁などともなひて中の川原にあそひける時かしこの多ともかいちらしてそのかたはらに

74 ・なの川をあかぬあまりにうつしても水のけしきはかきもとゝめす

夢にはなを見て

75 ・夏のよのゆめに見えこし桜花春のねふりやさめぬなるらん

76 ・立ちつゝく川そひ柳しけゝれともりきて水にすめる月影

「(8・オ)

三月うたあはせに

77 ・おもしろき事も無とは思ひしは花見ぬひまのこゝろなりけり

78 ○・谷ふかきこたかくれの山つはきとりすかりてもたをりつる哉

79 ・いけ水のそこにつれるかけさへもうかふと見えてちるさくら

かな

80 ○・こきませてちり来るさくらもゝの花みわきかたくもなるゆふへ

かな

81 まつかえもおれぬはかりにまとへともまたかすさかぬふちの花

ふさ

82 ○・ちりとまるくものを丸のさくら花かそふるまゝにもかすそしら

れぬ 「(8・ウ)

83 ○・わかえよりわかえさしてゝいやましにうむはかりなるいと柳か

な

84 ○・花見つゝわかふしゝはのつく／＼しねながらにさへつまれつる

哉

四月 そま

85 そま人のまきのこけらのくつまでも見いてゝひろふさとをとめ

とも

み山木

(生立もせず)

86 ・み山きのこゝろまかせにのふ枝もさまあしけには老たゝすして

いはら

87 山さとのかきねをすてゝわかそてをひかへてかほる花いはらか

な

ある時に

88 ・ゆきまとふこゝろのやみは人またにしらへをとほむつてたにも

なし 「(9・オ)

なはしろ

89 なはしろは水にまかせてさとひとそまのたきゝをはこふころ

かな

ねこ

90 ・くさむらにまるひてくるふからねこは何ゆゑにさはこゝろみた

るゝ

老松

91 ・としふれは松もしつくとうちたれてたちのみかたはうとくなり

ゆく

わかたけ

92 ・わかたけのこすゑしつかに吹風は心のさわくうきふしもなし

雨中閑窓

93 ・あめそゝくわかはゝまとにうちたれてこゝろしつかになれるこ

ろかな 「(9・ウ)

しのゝめ

94 はれかてにふりいる雨のくもはれてなか／＼ふかきやまのかすみ
みに

首夏霞

95 ・ほとゝきすなきやまとはむはるくれて中々深きやまのかすみに

いちめ

96 ・よの中をわたりかねてかひさきめの野こへ山越ひなかよひして

97 ・ひなちまていちめいりきてことたらぬうたなくなれぬみよのゆ
たけさ

雨中蝶

98 ・あめそゝく枝おもけなるこのくれにつはさかくもとふこちふ

かな

うの花

99 ・うのはなのかきはあらはに見えなからさとかけくらきゆふつく
よかな 「(10・オ)

う月十四日はかりにおきな遠きところよりかへりて
きたられけるにさま／＼の題をいたしてよみける中
に 蝶

100 ・さま／＼におのか心におりきたるてふの羽そてはあやにめつら
し

101 ・かけ見えしまとのこてふはあともなしねやにいるかとあくそ
のまに

たけのこ

102 ・かきつなるおやはなれてそともなるいはらの中に生るたけの

こ

梅実

103 ・なれるみもまためてたきをうめの花ちるをかきりの物とおもひ
し 「(10・ウ)

104 ・としことになりぬるうめのみのかすをおふしたてゝもさかせて

しかな

うの花

105 ・さきかぬるかきのうの花待かねてふゝめるうへにねむるてふか
な

106 なゝくさの花のゑまひもしられけりきみかなゝそちいはふこと
しは

七草園の翁の七十の賀によせてつかはしける

107 ・かきりなき君かそのふのなゝくさはよはひをへの花にやはあ
らぬ

らぬ

108 植木何かしか主人よりろくたまひしといひおこせたり
けるにあふきにかきてつかはしける

109 ・たゆひなくきみにつかふるすなをちはゆくすゑひろくなるはし
めかな 「(11・オ)

あらし

110 ・をるはかり夏山あらし吹来になへてみつえとなれるこすゑに
なわしろ

111 ・ゆたねたにまたまきあへぬなはしろのみつのにこりにすめる夕
月

ほたる

112 ・かはししにひかるほたるのかけのみそなかるゝ水のそこにとゝ

むる

五月二つありけるとしの夏のはしめつかたに

112 ふたつあるさ月のうちを夏にしてう月をはるとおもひなさはや

ほととぎす

113 いつのまにゆきちかひてかこしかたのそらのあなたになくほ

ととぎす
ー(11・ウ)

五月はしめのつかた翁きたられける時 題 やまなし

114 はなはみな雨にくたしてやまなしのさきしこすゑもわかすなり

にき

山から

115 いくたびかこのした水に山からのうちはふきては枝わたりする

う月うたあはせのうた

116 ・まかひてしかすみなかれて烟のみ立のこりたるうらのしほかま

117 ・ゆくへなくなりぬと見れはくさむらにあらはれいてとふこて

ふかな

118 ・ふちの花風にみたるともしりにちる時ならてちりもこそすれ

ー(12・オ)

119 ・おほかたの人のころもひとりたにゆく道見えてかよふちふは

ら

七月朔日の上にゆめのうちによめるうた

120 うめのはなさけるこすゑはよそにしてうれし山枝にかゝるつき

かけ

八月いつかこなるものゝつまにめあはすへき人のみま
かりて二十五年にあたる時かのはゝのもとにいつか
はすとて

121 ・女郎花はなにも花のさきそひてあらましかばとおもふあきかな

あきのはしめつかたに

122 ・のかれんとしひておもふやよの中をのかれぬよりのころなる

らん

123 ・のこりぬし夏をしつめておくつゆをこちよけにもなくむしの

こゑ

八月十五日に言道翁のみやこにいてー(12・ウ)たゝ

んとてこゝにきたられる時にさま／＼ものかたりの

つひてに

124 ・わかころいへはかすなりおもはなむよしおもひてもたへてし

のはん

125 ・たえかたきおもひをたちてわかるなりきみかころのたひなれ

はこそ

126 ・たひらかにかへりきませといのるにもわかいのちさへかつおも

ふかな

さてかの日になりければふたまたせといふところまで

おくりにとていまいづみよりかれこれつらたちて行

道にて田中なにかしかいへに翁をゐて行ければした

かひ行もありおのれら二人三人さきたちてちよのま

つはらのうらてなる松陰に行てまちあたるほとまさ

こにかいつけたりけるー(13・オ)

127 ・みやこより君かへり来とまつばらにかくてありなはいかに

たのし

うれしき

いとおそく来たられけるをかしこにおくりゆく道にて
けふはこのさとにやとりて人々と月見んなといはれ
ければたれも／＼さもといひてかしこのかはらにて
さけなととふへけるうちあまりにはしたなきやとり
なれはいまよりさゝくりのさとまでゆき給へなど
そゝのかしてしひてわかるゝとて

り

きみとわかうみ山とほくへたつとも月はかたみに見るへかりけ

はつかばかりまでいひつかのさとにありて舟でせんと
ていてたゝれけるにそのころ風いとほけしう吹ける

「へ13・ウ」にかしこに文をつかはすとてかいつけゝ
る

こよひ吹く野分をきみかおしはかり舟ていそかて待しうれしさ

(△此印おくにあり かきつゝるへし)

谷川もとゝきかすゝりと源氏ものがた^{ママ}とうるよしきゝ
たりければもとめんといひつかはしたるにすゝはう
らぬよしものかたりのみいとたかくうらんといひお
こせければこゝもあまるものなければきぬなとうり
てなといひつかはす時にすゝりなくてはなとかいっ
けて

(を)

・さむしとて身にもきられぬすゝりいしなからきぬひとへにもか

へんとそおもふ

あきさむくやゝなりゆくを老の身のきぬにもいしをかふるはか
なさ (かふるすゝりいしかな)

うたあはせにて いますこしのうたよみかへたる

(のちもかはらぬときはならまし)

・むかしよりよをうしてふそいまよりの猶よろつよにかはらさる
らめ

(けり)

・吹きかはすあさの夕風さたまらてかやりのけふり立まとひぬる

すて子をよめるうたに

△すてしおやすてられしこのいかならんとともにすみてもすみかた

きよに

とよみはへりしをとみにすみてはすみかたき世にと御
なおしありしはいかにきこえ侍らんもとはもろとも
にすみてさへすみかたきよにこそすてしおやすてら
れし子わかれ／＼ていかならんといふ心になん

△よの中のゆめもさまさてたれもみなつひのねふりとなるそかな

しき (一 二今すこし)

とありてかけきかうたに似たるものから

さめぬねふりとなるそかなしき

又

つひのねふりはさむる也けり

と二うたには出入あり さむる也けりの「へ14・ウ」

きはべらず

かたいかが きゝわけ侍らん

九月のはしめつかたゆめのうちにてゆめのうたをよめる

136 ・うつゝにもゆめにもまじるゆめなれやうつゝとおもへはゆめと

さめつる

とよむとおぼえてさめける時に

137 ・ゆめのうちにゆめ見てよみしゆめのうたおもふいまさへうつゝ

けもなし

雨いたくふるひに谷山何かしははしめてきたりて春の

花あきの紅葉になどおもひしをなとよみける時に

138 花につけ月につけてもかちし人きませはあきのあまそゝきして

はつあきのうたあはせに

139 ・おもふ人まちえしはかりうれしともかなしくも吹あきのはつか

ぜ (15・オ)

すて子をよめる (前二有)

140 △すつるおやすてらるゝこはいかなれやともすみてはすみかた

きより

十月すゑつかたまでもあしやのさとに翁のやとられけるよしきゝていひつかはしける

141 ・なにはちにゆくともゆかぬかりふしはよしやあしやとおもひこ

そやれ

もみちのちりたるをつかはすとてひろげる中になし

くちはのをかしげなるありければかいつけゝる

もみちの中にもあしのくちはかな心なしとは見えぬいろして

たれか見るへき

「(15・ウ)

猶おほつかなきたよりに文つかはすとて

144 143 ・おほつかなたちわかれても百日へぬちへの波路をわたりしや君
きみをのみつねにまちうる山人のことはさらぬ冬こもりして

さ月はかりにむさしのゆにもものしける時天拝山のやしろにまふてんとて内田ぬしかさそひければいさとて
かれこれものしていて見れはとくゆきてかけもなく
さてかしこにいたりたちぬれとあらさりければ

145 いさといふをあといふうちに老らくのおくるゝことも山ちのみ
かは
ちりはくをのこにかゝる人や見つらんなどへとおし
なりければ

146 たまさかに人け見いてゝものとへはこたへたにせぬ山のくちな
し「(16・オ)

かと田うゝるころなへをさと人のおこせけるをいさこ
の君をつかはすとて

147 さと人のいはひおこせしちまちたのさなへとりわき君にこそや
れ
言翁のたしろといふところになかくやとりてかへられ

148 きみをまつひかすはかりにくはゝりしさ月もかひの無ことしか
さりけるころ

な

おなしとしなにはにゆかれけるに冬梅のさきいてらる
かいつのとしよりもおそかりければ花につけてつかは
しける

149 いつよりもおくれてさけるうめのはなきみか見えこぬ冬としる
まて

150 みやこへのはなのおくるときにはおくるともかひなくは見しふるほと
のうめ 「へ16・ウ」

秋の末冬のはしめのうたあはせを翁につかはしける中
に

151 ・あさな／＼おとろくはかりつゆしもおきやつれゆくもゝくさ
の花

152 ○・山風にすゝきあきはき女郎花みたるゝのへや花のさねとこ

153 ○・もみちせぬこたちにあたるかけまてもうすいろつきて見ゆるあ
きのひ

154 ・のこりなくあきのひかすもすきか枝にきえのこりたる月はかり
して

155 ④・うみとほくわたりきなからしはしたに羽ねもやすめずくるか
りかね

156 ○・このまもる月のひかりもおのつからよわけに見えてちるもみち
かな 「へ17・オ」

157 ○・うつゝにはうつゝありともおもほえずゆめにはゆめを見ると見
なから

158 よのまよりあきはくれゆくものならんまつよわりきぬまつむし
のこゑ

159 ○・月のゆくみちをひらきてかたよりにあつまるくもはこゝろあり
けり

160 ○・しもこほる松にはたゝくあさからすつゝしりなきもくちこはけ
なる

161 くみわけてむすふひまにもまし水をわかものかほにふたくもみ
ちは

162 神無月たてはしくれもふるとてかかさゝしいつるあさひかけか
な

右十三首歌合 「へ17・ウ」
翁の文に大坂は霜いたくたえかたしなとありけるかへ
りことに

163 しもふれはかならず雨のふるさとはさむさのとむるひまもあり
けり

164 さしむかひなかきよひとよかたりてもあくよなけなるきみかや
と哉 さちえ子かいへりやとりて

ある人のもとにやとりけるよいとさむかりけるにふす
まなとうすけなりければあるしのきたるきぬなどぬ
きてきせけるよあめのふりければまたのあしたよみ
てつかはしける

165 こゝろさしかさねしきぬのかりふしにさむき雨よものどけかり
つる

はのいたみけるころうたあはせのうた

166 とくおこせなどいひおこしける人にわらわすとて
かつおつる老のかたはのいたつきにそやといふたにもものうかり

けり
「(18・オ)

古今集のはるのうたとも見るうちに水入にさしたりし

文にうめのかほりければ

167 むかし人めてし心をさたかにもしらせてかほるうめのはつはな

としのうちにうくひすなくをきよて

168 またきよつはるのしるしに鶯のとしもあくるをまたぬはつこゑ

169 人はみな冬のまはなるとしのうちのはるしりそめてうくひすの

なく

はなち鶯

170 ・なれ／＼てまどにけちかき鶯はおのつからなるはなちとりかな

「(18・ウ)

白紙 「(19・オ)

しふかき

171 ・かきみのしふきほにもならずしてなれるとのみもおもふは

かなき

山田

172 ・たよひとりゆく人見えてなか／＼にさひしさまさるあきのを山

田

くつはな

173 ・たかむらのかなたこなたをまとひきてまつかえにたにさけるく
すはな

こなるものにつまにせんとちきりける人のをさなくて

みまかりて二十五年のとふらふ時かの母のもとにつか

はしける

174 女郎花はなにもはなのさきそひてあらましかはとおもふあき

かな
「(19・ウ)

そま

175 ・何事もたらぬ／＼のなけきのみこりつるそまとなれる世中

故郷月

176 ・八重むくらまへにまとへるふるさとのはたゐにすめるはつあき

の月

きく

177 ・あまりにも花をかさねてきくのはななさけなきまてたわみぬる

哉

178 ・なかつきのこゝのかさねにさきにけりあめにたわめるしらきく

の花

もみち

179 ・人めには中／＼はちぬやれきぬもくらへくるしきやとのもみち

は

うつみひ

180 ○・さむきひのゆふくれかたにかへりきてうれしやのこるいほのう

つみひ 一(20・オ)

冬よ

181 ・冬のよのさふさゆるへてふる雨は老たるおのかいのちなりけり

風のやとり

182 ・はまかせのやとりのまつにさわかしき心さへのやときはなるら

ん

枯木

183 立かれのうめよりおちに生いてゝ花さくへくもわかゝへるなり

おきな

184 おきなどちあひ見るたひにくりかへしいくたひおなしむかしか

たるそ

醜婦

185 ・山の井のそことうつせときよからぬわかおもかけはあらふかひ

なし

書 一(20・ウ)

(その) (も) (ゆはかり)

186 ・いにしへの文にしるせる人のなにおもかけをさへ見るこゝちし

て

九月十八日にれいの日までかれこれこよなといひにこ
らしたりけるにこさりければとひつかはしゝに

187 ・やまぎとのときもみちはにみやこひと心おくてまたしとやこ

ぬ

かれこれもみち見るにとてきたりける時

188 ・うちむれてけふよりぞ見る紅葉のいまいくたひか人をつとへむ

もとゝきかこむといひてはらくこさりけるころもみ
ちを一葉かみにつゝみて

189 ・たゝひとは見ておるやおらすや

もとゝき

190 ・すくなきになれぬ人も紅葉を 一(21・オ)

かたすみにくる人のはてのこのめものするため水を
おこせといひけるにつかはすとて

191 ・おやおもふ人のこゝろをくみわけてやるまし水はことにすみ

けり

六国か安政四年みやこにありける時かしこの人々のう
たもおこしける時にいひつかはしける

192 ・うすくこくちれるみやこのみぢばをきみひろはずはひなにみ

ましや

とのゝみ寮にさきけるりようりきくといふ花をみてつ
からつませ給ひしとてある人よみおこしければ

193 ・みてつからつませる花ときくからに世にたくひなきかこそほ

へれ

十月六日に貞子の君かみまかりけるよしきゝて手向の
花ともゝとめけるにかれたるいときく柳草なとい

さゝかをりて

194 ・をる花もなき冬かれのくさはらにきみかくれぬときくそかなし

き

冬日

195 ○・冬の日のまとろみつろふまつかけのかはるすかたのおもしろき
かな

冬月

196 てらすひはさらにもいはす月影のおほるなるさへはるかとも見

よ「へ22・オ」

冬夕月

197 ・まとのとのやれまもわきてたゞみにもおくことうつるしものゆ

ふ月

十二月歌合に

198 ・おくしものあさしふかしをねならにしろのみとしをへししる

し哉

199 ・はなれいそのいはねをたゞく波のおとをきかぬまもなきしまか

けのさと

200 ・月影のさえわたりたるのきの竿しらせてひかるよはのはつしも

201 ・夕さればはなちかひなるうしのこもおのかふしとにかへりてそ

ぬる

202 はるまたぬうめのゑまひを今しはしおしとゞめてもつもるしら

ゆき

203 ○・人きぬといはぬはかりにわれを見てともにくくはす小田のたつ

むら

204 ○・ほころふるうめのはつはなたをるにもまよひやさしきゝぬのそ

てくち
「へ23・オ」

白紙「へ23・ウ」

白紙「へ24・オ」

夏のうち まへに入をこゝに

ほたる

205 ・ほたるとふかけもすゞしき山川をゆひへたてたるさとのしはか

き

松林

206 ・一むらのまつのはやしをひとこゑのひまにすぎ行山ほとゝきす

207 ○・おもふことたれるならねとわかこゝろまつのはやしにとゞめて

そすむ

けふり

208 ・ゆふけたくみなどの舟のけふりにもうかふはかりに見ゆるまつ

はら

ねむのき

209 ・よるひるもわかたぬ花のぬねふりをわらひてかほるかきのねむ

のき「へ24・ウ」

すひはなかつら

210 ひめもすにすひはなかつらあかすしてよとこにしてもねたるち

ねかな

なはて

211 ・をちかたのむきふの中に行かひの人の見ゆるやなはてなるらし

鶯居

212 ・こきいてゝ舟より見ればはこさきの鳥居も波にたつはかりして

ほたる

213 ○・夏のゝをかなたこなたになかれたる川すちこととふほたるか

な

こかくれの月

214 ・こかくれにはてぬる月をいつこよりうつしとりたるにはの池水

かはらけ

215 ・かはらけのわれにひとしくみち中にさておかれてもとる人そな

き 「へ25・オ」

さみたれ

216 ・かは水のあるまてはやましとかあかぬけしきのさみたれの

そら

こけ

217 ・はつかなるやとのこけちもいつしかとやへむくらふになりけるかな

にはとり

218 ・あさいするあるしにもぬにはつとりあかつきおきを夏もわす

れす

ねむのき

219 ・つれ／＼と雨ふるひにはねむのきも人にかはらぬ心見えけり

八月十五夜おくりにゆきける人々とゝもに

言道翁にわかれてかへるさに

220 △わかれつゝかへるころはやみなれや月のさかりに道まとふら

む

おなし心に 「へ25・ウ」

221 わかるればやかてもきみかかへりこむとしのはるへそたゝにまたるゝ

おくりにゆきける人こかにきたりてよもすから月見るう

な子

222 ・たひにしてきみか見るやとことさらにしたしくなりぬあきの月

影

みきのうたともかきて翁のもとにつかはしけるにかへしとて

言道

223 ・わかれつゝたひゆく道のくれゆけはおもひやるやとおもひやり

つゝ

以上 二百六首 「へ26・オ」

白紙 「へ26・ウ」

うまのとしのはるのはしめつかたに

224 きふまでこほりて見えし川くまのよとより水はぬるひそめけ

り

225 ・あめとのみふるやのゝきにおとしつゝ竹になかるゝ春のあわゆ

き

226 ・いそぎぬる梅にきそはぬあをやしすかたのまゝのすかたなり

けり

ある時に

227 ・いすゝ川わたりはてゝもたゝせへぬかのきしにけて遠さかりな

む

228 つく／＼と心のありかたつぬれはあさしふかしのなかになつさ

ふ

229 あわゆきのふるすなからにうひすのおやになくねをまねふたに

かけ 「へ27・オ」

人のいへのうめかえをれてさかれるを見て

230 たか心かけたるかきのうめのはなをりさしなからさてもおくら

ん

故郷花

231 ●・ともすればまたゆきしものふるさとよにおくれしとさくさく

らかな

寄花

232 ○・物おもふころのくまのめにさへてかすまぬ花もおほなる哉

前ころ素行知良などはからすきたりければこのわたりを
こゝかしこありきける時

233 ○・を山田のあなたに花をふりさけてちはらの松のもとゐする哉

散花

234 けしきなくおちなむよりはさくら花吹まく風にちらばちるなむ

「へ27・ウ」

しほひ

235 ・しら波にかくれていはもあらはれてありそゆたかにひける夕し

ほ

ゆふなき

236 ・いそ山のすかたをうみに急かくまでさやかにうつすはるのゆふ

なき

川舟

237 ・なかれゆく花に心はうつしみのかくのみのせてくだる川舟

花さかり

238 ・おくにのみころらの日数すくしきて時のまもなき花さかりかな

春夕

239 ・ゆふざればねぐらにかへるいへばともいかなる花にけふはくら

しゝ

(趣向よし よみがたし今少とありしうた)

240 ○ひたのをにひかるゝはなものかれえぬすみかのつとめるよなり

けり 「へ28・オ」

241 ・さきたらすおくれすちりて行花はおのつからなるちきりなりけ

り

242 ・まなくこし花のさかりにこきませてよのうきなりそ立まとひぬ

る

樵女

243 ・おなしくは花のかけともいはすしてまつに雨よくさとのきこり

め

244 ・はることにさかゆく花のしたかけはこけのむしろもしきひろめ

つゝ

春風

245 ・はなさけはみそらにさわくやまかせははるのころやしつめか

てなる

夢春

246 ○・はるのことみしかきものはなかりけりいつれのとしかなかしと

おもひて 「へ28・ウ」

八重桜

247 ○・あまりにも枝たわむまでさきみちてちりわつらへるやへさくら

かな

落花

248 ・さくらちる風のまに／＼わがころはなちやりてもすくす春か

な

249

夏のはしめつかた

・むかし見しちとせのかはのうかひ舟いまもこゝろにうかひくる
かな

安政五年うまのとし四月十三日に相遠をとふらひける

時けふはこゝにしはしなといひてとゞめければ わ
れもかへりうくおもひなからちゝ君ひとり山におは
しませはとくかへらては待給ふらはたちかきとい
ひてかへりつるにあくる十四日みまかりければいと
くちをしくて「(29・オ)

250

しはしとてわれをとゞめしおもかけは心にきえぬかたみなりけ
り

もと

251

・おやを置いて先たつこともせさりしもまかせぬものはいのちなり
けり

ことし幸丸十三なりけるに相遠とわれらおやこになり
そめし時もかれ十二歳なりしかはその時のことさへ
しのひていてられて

252

・おやといはれこといひそめしむかしへやいまのうきめのはしめ
なりけん

相遠かいましたやまひしてふしたりけるころひとよをみ
□□にてほとゞぎすのこゑをきゝてともにましはる
ことゝもおもひいてられて

(をめでし)

253

・きみをよふしてのつかひとしらすしてはつねきゝいるやまほ

とゞきす「(29・ウ)

254

あとのことゝもはてしかへるさに雨のふりいてければ
・こを思ふ道のそらとておやのみをかきくらしても雨のふるらん
とやかくあつかひける時に

255

かねてよりわかなきあとをたのみてしこのなきからを中々に見
て

書

256

・からやまとかしきき文はよの人のこゝろのやみの月日なりけり
山彦時鳥

257

○・ほとゞきすまぢうるのみやおもふ事たかはすなれるおのか山す
み

ある時に

258

・わかみをはつかふる人になせりともこゝろにかなふことなから
まし「(30・オ)

259

・かとしてせんとしも月日もしらねともつひのたちひはおもひこそ
やれ

260

○・こゝろよりうけひくことはなく／＼も人のことはにしたかはれ
つゝ

長雨

261

・うの花のなかれし雨のなこりよりふりつゝきたるきみたれのそ
ら

五月雨

262

○・きみたれのはれぬもよしと思ふかなこゝろのまゝにこゝろしつ
めて

263

はるゝかど見えし日影のくらみきてまたふりまさるさみたれの

雨

谷水

264 ○なかれゆくさまは見えねと見ゆはかりおとにしらるゝ谷のほそ

水

梅実 「(30・ウ)

265 ・はかくれにさをのうきめをのかれたるうめのこのみもあめにお

ちけり

かはつ

266 ・さみたれのを山田おつるみなくちにむせひあひてもなくかはつ

かな

わかたけにあさかほのゝほりたるかく書きたるものになう
たかいつけてよと人のいひければ

267 ・枝も葉もまたとゝのはぬわかたけにまとひのほりてさけるあさ

かほ

六月十六日に貞和にめあはすへき人をはるこのゐてきた
られける時に

268 ・わかたけにひめこまつさへうゑそへて老の心ものふこよひかな

かへしとて

はるこ

・わかたけにならぬこまつの生さきのみとりのいろはきみかまに

〈(31・オ)

おなしこゝろを

兄の君

270 ・まつたけのつきぬよはひをむすひこめてなかくそたのむきみか
めくみを

この日は久子かくる道にて陶山一卷まてにあひたりけるに大

なるうちわをつかはして道のあつきをよぎよといひしと

てもてきたりなればすなはちかへすとて (そのうちわ

にかいつけゝる)

271 ・あつきひにうつしうへ(44)たるひめゆりもきみかあふきのかけに

しほれす

よのちいとわつらはしくおもひける時に

272 ・こゝろにはすてしわかみもすてかたき人にそむかん名にそひか

るゝ

むかし言道翁よりあさかほの花をつゝみておこせられし
ことありけるをこのほと見いてゝ大阪にすまれける時つ
かはすとて

273 ・こゝろさしふかくとむれはあさかほのはなのいろかにうつささ

りけり 「(31・ウ)

白紙 「(32・オ)

秋 三日月を見て

274 まつかけのすきのひまかとたつぬれはうすくもかくれ見ゆる三

日月

275 ・おほかたは見てやあるへきはつあきのにほひそめたる三日月の

かけ

夏行路雨

276 ・ふりやめはもとのあつきにかへりけりあめのうちにぞ道はゆき

なむ

藻

277 ・あき風は川のそこにもかよふらしすゞしく見ゆるみづのなひき

も

あさ顔

278 ・わかたけにまとひのほりてありあけの月のおもにもさけるあさ

かほ

279 ・おとろふるおのかしたはもかへり見ずさきまとひゆくあさかほ

の花 「(32・ウ)

水月

280 ・まつからのつゆのひかりも見ゆるまでかけ水底にうつる月哉

蚊遣

281 ・山さとのかやりのけふりたちかてにたな引こむるあきの夕きり

出月

282 ・あかつきの一むらあかきくもまよりしらけていつるありあけの

月

283 ・むらさめのくもに立そふゆふにしも中たえ／＼にはるゝそらか

な

きり

284 ・山さとのあさけの畑立こめて霧のみふかき野へのはつあき

「(33・オ)

ある時に

285 ・すきてこしかたをおもへはいくたひかあやうきせをもこえしな

るらん

アメリカエンキリ火などの舟こゝかしこに來りてよの
中さわかしかりけるころ七月十日ばかりより八月も
ちはかりまで雨風いたくはけしかりければ

286 ・おそひこむごとくに舟をよせしとてあめの神風立さわくらし

柳

287 ・あき風にさわきたちたるあをやきにすかりにねてもとぶこてふ

かな

月

288 ④・はしぬるかたにはさゝてふせいほのおくにいりくるこかく

れの月 「(33・ウ)

289 のきはなる松にかゝれる月かけはてにとるばかりまちかゝりけ

り

290 ・わかをかのもとの松をよなに／＼ かへてものほる秋の月影

● (今少しのうた)

291 ●さわきたつ松のかはかせあやまちてはちすの花はちるけしき

かな

(今少)

292 ●さめかねて見えしよのまのゆめにたにあきのけしきのにほひ

つるかな

(今少)

293 ●かそふれはいつかいつよのあくるまで吹もたゆまぬあきの山

風

294 ●かたよりにうらふきかへすかはやなきしらけてさふきあきの

夕風 「(34・オ)

八月十四日の夜馴花亭にて月見ける時くもりければ

ゆきとし

295 ・ひともねよとやくもるつきかけ

といひ

いてゝありける時

296 ・なかきよをてらしつかれて中そらに

神代といふ題に

297 ・くれたけのすくなるかみのみよゝりもよのわきはひのふしはあ

りけり

なは

298 なひこめしなはもいつしかすゝたれてこゝろなかくも見ゆる山

ひと

人

299 ・すてかてにわれをとひくるよの人なさけもうけくなれる山す

み

すたれによする

述懐

300 ・よわたりはすたれのいとらうへにゆきちかひてもおなしす

ちなる

はつかり「へ34・ウ」

301 あまくもりほしたにみえぬゆふやみにうちむれてくるはつかり

のこゑ

夕日

302 そらとほくなかめやられて夕つゝのかけたにあきはさひしかり

けり

山家

303 ・山ふかきそまのやとりはひをたきてよるのふすまもなしとこそ

きけ

あさかほ

304 ・かとのともひらかぬやとのなかゝきにねさめかほなるあさかほ

の花

あるしもわかみもこゝちつねならすしてすくしけるあき
の宵に

305 かきひとへあなたのゝへにいてもせてやとをかきりのあきはき

のはな

ときはの山

306 ・ときはやまいろにいてねとおのつからさひしきあきはのかれさ

りけり「へ35・オ」

いそのまつ

307 ・はなれそのいはねのまつは遠かたのしま山あらしたねやまきけ

ん

世

308 ・たれもみなざりところなきよのうさをのかれんとのみおもふは

かなさ

月

309 ・よひ／＼の月のもりくるまつのまにかならすかくと見ゆるくも

のい

310 ・ゆたかなるをたのなかなるひとつやもかたへは月のかけくらく

して

311 ・けふのまとおもひしことをなしをへてむかへは月も山をいてき

ぬ

312 ・秋の山のほるわかみをしたひきてくたりゆくさへおくる月影

313 ・浦まくにさしかはしたるえた見えて月おもしろきこかくれのい

ほ「へ35・ウ」

314 ・とよとしのあきたのほたちさやかにもてらしみちたる中そらの

月

十五夜雨いたくふりければ

315 ・かひもなき月のさかりのこよひかな人さへいへに雨こもりして

むし

316 ・さなからにそれとはきけとまたしくてこゑもつゝかぬにはのま

つむし

あさほらけ

317 ○ありあけの月見るからにさゝぬともきりにふたかるあさほらけ

かな

丁といふできものをよにあまたわつらひけるころかの

やまひをして

318 ・おほかたはおくれかちなるやま人もうきてふよには生れさりけ

り

あきの田をよめる長うたならひにかへしうた」(36・

オ)

319 ・山見れば谷のくま／＼うみ見れば波よるきしにあきの田のほ波

うちあひてとよしほにあらはるゝとよしのいね

かへしうた

320 ・おく山の谷のくま／＼うちいてゝ波よるきはみに立ほなみ哉

ある時身といふ題に

321 ○いかななる身ともしらねとゆくすゑはかぜにまかするけふりな

りけり

人心

322 ○風たにも草木にふれて見えなから人のこゝろそしるよしのなき

日ことにたけかりのつひてに人のとふらひけるころ」

(36・ウ)

323 ・あきの山見ぬ山人となりけり見にくる人にいとまどられて

紅葉

324 ・けふ一日ふかれていろにいてにけり風のそめたるあきのもみち

は

暮秋むし

325 あきふかき山のかげなるすゝむしはひるさへもなくものとなり

ぬる

水鳥

326 きふまてかそふはかりにうかひたる池の水鳥けさはいくらそ

菊盛久

327 ・きくのはななかさきかりを見はてゝもあかぬこゝろはうつろは

なくに

庭月」(37・オ)

328 ・あきふかみちれるこのはのかす／＼にしくれてやとるにはの月

影

暮秋

329 ・そめあへぬおのか紅葉もおきなからけふをかきりのあきのゆふ

くれ

かり

330 ・おのかとおもふまゝにもかたるらんこゑむつましくわたるか

りかね

あきのころよりことさらにくる人しげかりけるに落葉の

ころまで猶人たかりなりしかは

331 ○をり／＼はこかしとおもふ人ならて人にもしられぬやまかけも

かな

冬木の梅 「(37・ウ)

332 待人もなけなるをやのゝきはにはとくもさくへく見ゆるうめかな

あるあしたに

333 ・よをななみたきつくしける樵女のあさな／＼にそまかよひする

まきのと

334 ・せくこともあきはなかりしまきのとをひるさへあけぬ冬となり

にき

かれをはな

335 ・ゆふつくよ冬の嵐もたえはてゝひまありけなるかれをはなかなぬるてもみち

ぬるてもみち

336 ・冬かれのこすゑにまじる紅葉はあきにおくれしあるしなりけり

「(38・オ)

からす

337 ・もとかしくなくかときけはつゝましくこゑくちかろきむらからす哉

す哉

冬日

338 ・冬日のいそくまに／＼いそかれて遠き道をもはやくきにけり

小春

339 かみな月ひるははるにも似たれどもくれゆくまゝにしものよあらし

よあらし

暖日

340 ・みしかきもいまやかきりといひ／＼て猶みしかくもなれる冬日

かうたに

341 ・おくしもにかるゝしたはもしらしかしまたいろふかきかうたに

のはな

「(38・ウ)

(ろ)

342 ・にきはへるさどのようすのおとたゆみわれもつかれてまとまれ

つゝ

冬桐

343 きりのはゝとくおちはてゝ寒夜にやとりなけなるありあけの月

冬松風

344 ・もろともに老ぬる松もすむ人も冬のよかせはさけふはかりそ

きつね

345 月さふき冬のゝきつねなくこゑをさそひかほなるしものよあらし

しはすはかりにわつらひてねたりけるころゆきのふりける

を

346 ・しはしたにまくらはなたてふせる身もおきたつはかりふれるし

らゆき 「(39・オ)

347 わつらへるわかみふせやのまとのとをひろくませけに見たるゆ

きかな

しはらく素行ぬしかこされければいかてなといひつかは

しける

あくるひきたりて

素行

348 やみふせるきみをはいかてよそに見んかなたこなたもうたの

ちゝはゝ

かへし

349 よそに見ぬきみかこゝろを見るまゝにこをまつはかりまたぬ日

もなし

やまひおこたりかたになりてこのほどあさからさりしこゝ
ろつくしなとけいしける時こたひはおほつかなくこのみす
くなきこゝちし侍りきなどいひければ 素行

350 うかひぬるあわやときみを見しほとは谷のいつみもくみうかり

しに 一(39・ウ)

かへし

351 きえぬへきあわをもきみかそてひちて谷のいつみにせきとゝめ
つる

いたくなやましかりけるころたひにまします師の君をお

もひやりて

352 たひにある人をまつまはふみならしつひのかとても立とまりて

む

おなしころ

353 をしからぬいのちとつねにおもひしはやまひになれぬ心なりけ
り

あるしの君とゝもにふしてなやましたりければかたみにお

ほつかなくおほえて

354 きみとわかかなたこなたに行とまる道はいつれかいつれなるら

ん 一(40・オ)

十二月二日夜七度はかり地震いたくゆりける時に

355 あめ風をともしなひゆりてよもすからいくたひ人をおとろかすら

む

356 いかならむかたにこのよをゆりかふるあまつみかみの御わさな

るらん

357 △あめつちのかみのこゝろやさわくらんゆりにゆされるあきつし

ま山

(下句今少なるへし)

(上句今少)

358 △をちかたのさとうちめくる時つゝみかすきこゆるやねよとなる

らん

あられ

359 吹おこる松のあらしのちかつくとおもへはやかてふるあられか
な

十一月二十八日は大坂につかはすかへし」(40・ウ)

おきなするかにゆきしよしきゝてそのことをいひつ

かはすとて

360 ふし〃のゆきとくみし君はさとにふる□□何をするかにきみなく□

□□□

御うた

361 こと舟もなつめる人もひとりたにはらひつくさむかみかせもか

な」(41・オ)

覚え書」(41・ウ)

362 (いつこより 匂ふともなき花のかにてふもよそへる春のゝへか

な)

中村石珩

363 (花のころうちふせしよりあやめ草ひくゝねながきわかやまひか

な)

(みまかりける時うた)

(花ぬれし) (さのまさる)

364 とらふれはいかまくほしくおもふかなかたありかたきみよにう

まれて」(44・オ)

覚え書」(44・ウ) (45・オ)

筑前 筑紫

365 かみかけておもひたちぬるなかたひの猶ゆくすゑをいのるかし

こさ」(45・ウ)

白紙」(46・オ)

覚え書」(46・ウ) (47・オ)

白紙」(47・ウ)

註

(1) 『向陵集』は、望東尼自詠歌約1850首、望東尼以外の歌54首を加える。

また、『みのとしようまのとし』は、末尾の覚え書の中に見せ消ちの判読不明歌を含む歌が数首あるがこれは採らない。

(2) 『向陵集』の歌稿のひとつに『木葉日記』がある。これについては、前田淑氏の「野村望東尼自筆本『木葉日記』」(福岡女学院短期大学紀要第18号

昭和57年)に詳しい。

(3) 拙稿「和歌文学大系 草径集」(明治書院)解説参照。

【付記】

本稿の資料閲覧、および翻刻については、福岡市博物館に御許可を賜った。ここに深甚の謝意を表する次第である。

(しんとう やすこ・九州大学大学院博士後期課程)